煌めく刃と白き翼の歌

GAU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
煌めく刃と白き翼の歌

【Ｎコード】
Ｎ０７８５Ｘ

【作者名】
ＧＡＵ

【あらすじ】
初心者殺しの迷宮に閉じこめられた駆け出し冒険者のクロード達。その迷宮で同じように閉じこめられた冒険者達と出会い、協力して脱出をはかるのだが……。
ＴＲＰＧ『アリアンロッド』の世界を駆ける冒険者達。
行く手に待ち受けるのは数々の冒険……？
そんな彼らの物語です♪

さあ、冒険の舞台が、君を待つ！！

第一話

暗い、ほの暗い石室の中。
その、なめらかな表面は、薄く光を放ち、月明かり程度には明るい。
明らかに人工の石室の中、そこにひとりの少女がしゃっくり上げる声が響いている。
それは、鍔広で上へ軽くとがった帽子を乗せた、軽くクセのある長い黒髪に緑色のメッシュを入れた“女性”にも見える少女。
その体躯は、明らかに普通の少女より二回り以上大きい。
そんな体躯を隠すほど大きなローブをまとう彼女の背には大きな翼がある。
普段なら楽しげな弧を描く太めの眉も、悲しみの八の字を描き、愛らしいであろう大きなタレ目の大半を占める、大きな黒瞳は、ゆらゆら揺れる水面のように悲しみをたたえている。
「ひっく。ねぇクロードぉ、わたし達、ここで死んじゃうのかなぁ……。グズッ」
「そんなことは無え。俺が、守ってやる……」
そんな悲嘆にくれる彼女のそばに、髪質の固い短めの金髪にバンダナを巻き、革製のジャケットを身につけた小柄な少年が片膝を着いて彼女に声をかけていた。
その目は鋭く猛禽のようであり、その腰には白兵戦で使えるようなダガーナイフとロープのように巻かれたウィップを吊していた。
そして足下には大きめのハーフブーツを履いている。
いつも明るい、この大きな幼なじみの涙を消し去ろうと必死で慰めるものの、その声には力が無く、弱々しい。
自分達の状況が、かなり絶望的であることを少年は知っているのだ。
おもむろに顔をあげ、奥にいる仲間へ視線を向ける。

「ウォレス！　そっちはどうだ？！」
「……ダメだ。カルロスはもう……」
ウォレスと呼ばれた青年は、肩に掛からない程度の長さの銀糸のような髪を覆う、簡易タイプの兜を脱ぎつつ、少し前まで仲間だったものの側でひざまづいた。
切れ長の双眸は悔恨にゆがみ、すっきりとした顎の奥の歯をかみしめる。
彼の種族の特長でもある長くとがった耳も心なしか力無い。
「……すまん。俺が守りきれなかったせいで」
そのつぶやきが聞こえて、バンダナの少年も悔しそうにうつむいた。
迷宮の罠にかかり、転送された先で子牛ほどの大きさの黒い犬に奇襲された彼ら。“バーゲスト”と呼ばれるその魔獣を、なんとか倒したものの、仲間のアコライトは打ち倒され、とどめを刺されてしまった。
罠の解除は少年の役割だった。両親から教えられた技術にあぐらをかいて、油断した彼は致命的な失敗をしてしまったのだ。
連動する罠を見落とし、パーティを危険にさらし、犠牲者まで出してしまった彼の悔恨は深い。
と、奥から響く声が聞こえてくる。
「……なにか、来る」
「ッ！」
顔をあげてつぶやきながら身構える少年の隣で、ウォレスも剣を構える。
そして、迷宮に“彼女”の声が響いた。

『ちょっとエルロイっ！　どうすんのよっ！』
『ミィナ落ち着いて？』
『そうだ。リルを見習って落ち着きたまえよ』
『あんですってえ？！』

なにが待ち受けているのか分からない迷宮内で騒ぎ立てるなど、自殺行為にほかならない。
未だ若葉マークすら取れていない初心者の少年達ですらわきまえていることを出来てない声に、少年はやりきれない顔になる。
『む？　だれかいるようだ』
少し年配の声が聞こえ、足音が止む。絞られていたランタンの明かりが大きくなり、少年達を照らす。
「だれだっ？！」
誰何する女の声と、引き絞るような音が聞こえる。
少年は、隣のウォレスに目配せをし、彼が盾を構えてうなずくのを見てから口を開いた。
「……“遺跡の街”ラインの神殿に所属している冒険者だ。あんたたちは？」
「我々もラインの冒険者だ。どうやら同じ境遇のようだな。武器を下ろして話し合わないか？　ミィナ、弓を下ろしたまえ」
「けどっ！！」
「下ろすんだっ！」
「！！」
ごねる女性を年配の男性の声が一喝する。その鋭さに、女性だけではなく、少年とウォレスも息を呑んでしまう。
しぶしぶと弓を下ろした彼女の姿に、その場の雰囲気も幾分和らいだ。
そして、年配の男性と思われる姿が近づいてくる。
やがて背筋をピンと伸ばした、銀髪をオールバックにして首もとで結んだ、落ち着いた雰囲気の年配の男性の姿が見え、その胸に下がった聖印に二人は軽く息を吐く。
だが、わずかに足を引きずるような彼の様子に、二人で顔を見合わせるとクロードが訊ねた。
「あんた、怪我を治さないのか」

思わず訊ねたウォレスに、男性は笑みを深くした。
“アコライト”の職能についているものならば、大抵は癒しの魔術が使えるものだ。聖印を下げている以上、“アコライト”であることは間違いないはずなのだが、怪我をそのままにしている理由が分からなかった。
「はは、これは古傷でね。ふつうの癒しではまず治らんのだ。これが元で一度は冒険者を引退したんだが、古い知り合いに頼まれてね。彼女らに付き添うことになってしまった。ん？　そういえば自己紹介がまだだったね。大変失礼をした。私はエルロイ＝ハーゼイ。エルロイで構わんよ。今はしがない“アコライト”だ。昔とった杵柄で“サムライ”の技術の心得もあるが、もはや満足に刀を振ることも出来ん老いぼれだよ」
言いながら苦笑いを浮かべるエルロイ。なるほどその立ち振る舞いに隙はないが、腰に下げているのは軽量のメイスだ。
背中には円形盾を背負ってはいるが、その身を覆うのは、いささか頑丈な布製の服。むろんこれとて冒険者向けに無いよりマシな防具として販売されているもので、普通の服に比べれば何倍も頑丈だ。
それでも前に出て魔物と戦うには心許ないものだ。
クロードに答えたエルロイは、そのまま首を巡らせると後ろの二人に合図をした。

すると姿を現したのは、弓を背負いクロードと同じ革製のジャケットをスマートな肢体にまとった、長い赤毛をポニーテールにした女性だ。その白い肌と、つり上がり気味の碧眼に小さめの鼻と口。美人であることは間違いない美貌だが、クロード達をやぶにらみにし、口をへの字に結んでいる分、その美しさが台無しになっていた。
そしてもう一人。
褐色の肌にボリュームのあるコゲ茶色の髪を三つ編みにしたあどけない容姿の女の子。翼の少女と同じような鍔広の帽子をかぶり、手には先端に赤いクリスタルのはまった杖を持っている。

そしてその身を覆うのは、エルロイのものと同じような頑丈な布製の衣装。旅をするのにも向いた、華美な装飾など一切廃した機能的な服だ。

その二人のうち女の子の方が一歩前にでてお辞儀をする。

「初めまして、リル＝ナルセイタです。ネヴァーフの、炎術師ですが、体も鍛えてますので体力には自信がありますよ」

柔和な笑みを浮かべながらも力こぶを作ってみせるリル。その二の腕にはきっちり筋肉の盛り上がりが見て取れた。

ついで、少年達が女性に目を向けると、彼女は眉根を寄せる。

「……なによ」

「ミィナ、きちんとご挨拶しませんと」

少年とウォレスをやぶにらみする女性をリルがたしなめる。

容姿は幼いが、リルの立ち振る舞いは成人女性のものだ。彼女の種族でもあるネヴァーフは、“大地の妖精（ドワーフ）”とも呼ばれているのだが、この種族の女性は、一般的なヒューリン（標準的な人間）の子供に似ており、成人しても子供のように見えるのが特徴だ。したがって、リルも見た目より遙かに年上なのだろう。ちなみに男性は小柄でがっしりした体格に髭が生えている。

さて、そんなリルにたしなめられた女性だが、少年達に対してそっぽを向いてしまう。

それを見て深く嘆息するリル。

すると。

「ミィナ。ミィナ＝サーシェル。戦士よ」

と、つぶやくように名乗った。

それを聞いてリルは嬉しそうにうなずき、エルロイも目を細める。

そして今度は少年が一歩前に出た。

「俺はクロード。クロード＝レイドリック。盗賊だ。で……」

懐に手を突っ込んで何かを取り出した。

「こいつが相棒のメルセデス。俺の使い魔だ」

広げた手のひらに乗っているのは一匹のハムスター。後ろ足で器用に立ち上がり、お辞儀をする。
それをリルとミィナがのぞき込んだ。
「使い魔……ということは、クロードさんは召喚術をお使いになるんですか？」
不意にリルから訊ねられて面食らうも、すぐに苦笑いを浮かべるクロード。
「いや、まだまだだよ。今はメルセデスに攻撃して貰うくらいが関の山さ」
その言葉に反応し、メルセデスが右前足で、己の胸をたたく。
その仕草を見て、ミィナ軽く頬を染めた。
「か……可愛い……」
「はは、で、こっちの戦士が……」
ミィナの反応に苦笑いしつつ隣に立つ皮のジャケットをまとった背の高い銀髪の青年を立てた親指で指すと、青年、ウォレスは軽く会釈した。
「ウォレス＝アーセトンだ。エルダナーンの戦士だ」
「エ、エルダナーンの戦士っ？！」
ウォレスの自己紹介を聞き、メルセデスを愛でていたミィナが目をむきながら彼を見た。
隣でリルも驚いたようになり、エルロイも小さく感嘆した。
彼らが驚くのも無理はなかった。本来、“森の妖精（エルフ）”とも呼ばれるエルダナーンは、思慮深く温厚で、魔法に対する高い適性を持つ種族である。
反面、力が弱く、華奢な体つきからわかるとおり、あまり頑健ではない。戦士など、もっともエルダナーンに向かない職能なのだ。
それを踏まえてミィナはウォレスを値踏みするかのようにねめつける。
その視線に、ウォレスは向き直った。
「……なんだ？」

「……べっつにい？　あんたほんとに戦えるの？」
「……弓を主武器にしているエセ戦士に言われたくはないな」
「……なんですって？」
互いに毒を吐き、メンチを切り合い始めるミィナとウォレス。
そのやりとりに、リルとクロードが額に手を当てて嘆息し、エルロイも軽く頭を振った。
と、そのとき。
「ケンカはダメ～～～～っ！！」
五人の耳をつんざく声が響き、大きな羽音とともにミィナとウォレスは抱きつかれた。
「ちょっ？！」
「むぐっ？！」
ミィナとウォレスはその大きな体格に遜色無い力で抱きしめられ、もがくことしかできない。
それを眺めてクロードは大きなため息を吐いた。
「で、あれが俺の幼なじみのユーリカ＝シェイラットン。見ての通りドゥアンの天翼族だ。一応、風の魔術師って分類になる……のか？」
クロードによる疑問系の紹介に、リルもエルロイも首を傾げてしまう。
そんな紹介を受けて、長い黒髪に緑のメッシュが入った白い翼の少女、ユーリカは満面の笑顔になる。
「はぁ～い♪　ユーリカ＝シェイラットンです♪　歌うのが大好きです♪　でも、魔法は苦手です♪」
そうやって自己紹介をしたユーリカの声に、ミィナが何とかホールドから抜けだしながら、翼の少女を見上げた。
「ぶはっ、ま、魔法が苦手って……あなた魔術師なんでしょうっ？　何で苦手なのよっ！」
声を上げたミィナに、ユーリカがきょとんとなる。
「ふえ？　だってわたし、お勉強苦手だもんっ」

そう言ってそっぽを向いてしまうユーリカ。
その姿にミィナは呆れを隠せず、クロードは額に手を当ててうつむいた。
そもそもユーリカの種族である“剛なる人（ハーディー）”とも呼ばれるドゥアン族は、エルダナーンとは真逆の戦士に高い適性のある種族だ。
身長も成人すれば二メートル前後となり、力が強く頑健でもある。
さらに細かく“有角族（セラトス）”“牙爪族（ケイネス）”“天翼族（オルニス）”と細かく分類されはしても、適正じたいは変わらない。
そんな種族が魔術師をする事自体が希有なのだ。
だがユーリカはそんなことは知らないとばかりにニコニコと笑顔を見せる。
そんな邪気のない笑顔を見せられ、ミィナは言葉に詰まってしまった。
「……や、やりにくいわね。この子……」
「まあ、たいがいのーてんきでマイペースだからな」
絞り出すようにつぶやいたミィナにクロードが同意するようにうなずく。
そんな中、ウォレスは一人、天に召されようとしていた。

第二話

仲間の一人が天に召されかけるという珍騒動もなんとかおさまり、双方の状況を伝え合う両グループ。
「ふむ。聞く限りでもこちらと状況は変わらんね」
顎に手をやりながら、銀髪オールバックにした壮年の男性、エルロイはそうつぶやく。
その様子に、小柄で金髪の少年クロードは消沈したかのようになずいた。
「はい。俺が罠の全容を把握しないうちに解除したせいでカルロスは……」
後悔をにじませたその声に、エルロイは聖印に手を当てつつ、瞑目しながら聖句をつぶやく。
「こんなことを言っても慰めにもならんだろうが、あの仕掛けはベテランでも引っかかる可能性が高い。ここを生き延び、これからの糧にしたまえ」
「……はい」　拳を強く握りしめながら力強くうなずくクロード。
そんな彼の様子に、エルロイは微笑を浮かべる。
その時、横合いから声がかけられた。先ほどの騒ぎで窒息ししかけた銀髪のエルダナーン戦士、ウォレスだ。
「……それで、あんたたちはこれからどうするんだ？」
彼の言葉に、エルロイは再び顎に手を当て、軽く思案する。
「ふむ。もし良ければ協力してこの迷宮を脱出せんかね？　君たちが良ければ、だが……」
「ちょっとエルロイ！　こんな弱そうな連中と手を組むって言うのっ？！」　エルロイの言葉に素っ頓狂な声を上げるのは、彼の仲間である長い赤毛をポニーテールにした女性、ミィナ。
それを聞いてエルロイは嘆息する。
「……ミィナ。実力的には君と彼らの力量は同程度だよ。それに我

々だけでは前衛が足りない。君だってわかっているだろう？」
「う……」
真面目な顔でたしなめられ口をつぐむミィナ。その横で焦げ茶の髪を三つ編みにした、まだ幼い感じのネヴァーフの女の子が苦笑いを浮かべる。
「そうですよ？　ミィナ。それに接敵（エンゲージ）されてしまっては、あなたも実力を発揮しきれないでしょう？」
「……」
外見は幼くとも、中身はミィナより年上であるリルはやんわりと彼女を注意する。
「わかったら、クロードさん達に謝りませんとね」
「グ……」
リルに謝罪するように促され、顔を引きつらせるミィナ。
少し迷うように視線を宙にさまよわせてから、観念するように頭を垂れる。
「……わ、わかったわよ！　謝るわよ！」
ミィナは大きな声で承諾するとクロード達の前に立つ。
「え、えー、えと……その……あの……」
が、なかなか言い出せずに口ごもり、少し頬を赤らめさせながら両手の人差し指を突っつき合わせる。
「……そ、その……し、失礼なことを言って……悪かったわ……ってなによ」
広げた五指の先っちょをくっつけながら、少しぶっきらぼうに謝るミィナ。そんな彼女の様子にクロードが小さな笑みを浮かべると、それを見とがめたミィナがにらんできた。
「いや、何でもないよ。協力の件は、こちらにとっても願ってもないことです。よろしくお願いしますハーゼイさん」
やぶ蛇になってはかなわないとばかりにクロードは話題を逸らし、エルロイへと頭を下げる。
そんな少年の姿に、エルロイは笑みを深くした。

「いやこちらこそよろしく頼むよ。それから私のことはエルロイ、と呼び捨てで構わんよ？　クロード君」
「え？　いやしかし……」
呼び捨てで構わないというエルロイに戸惑うクロード。
そんな彼の様子を好ましく見ながらエルロイは一つうなずくと笑い始めた。
「はっはっは、無理にとは言わんよ。好きに呼びなさい」
「は、はぁ……」
そんな壮年の冒険者の姿にクロードは曖昧な笑みを浮かべることしかできなかった。
と、頭上から羽音が聞こえ、クロードの頭に柔らかい大質量がのっかる。
「ねえねえ、みんな何のお話してるの？」
１８０を越える長身に、緑のメッシュが入った黒髪の少女（？）ユーリカは、広げていた翼を畳みながらクロードに体重を預けてくる。対して少年は１５０に満たない小柄な体格なりに足を踏ん張りユーリカを支えるのだが、その頭にはユーリカのわがままボディの産物が鎮座していた。
「……うらやましくなんかないわよ。うらやましくなんかないんだから……」
「あらあら」
そんなユーリカの“女の象徴”に、ミィナは慎ましやかな自分のそれを手で押さえつつ両目のハイライトを消しながらつぶやき、リルはそんなミィナから徐々に距離を取りつつ困ったような笑みを浮かべた。
だが、そこへ一人の男の言葉が投げ込まれた。
「……よくわからんな。なにがうらやましいんだ？」
そうのたまったのはウォレスだ。彼の言葉に反応し、ミィナが殺気を向ける。
「……どーいう意味よモヤシ戦士（ウォーリア）」

「そのままの意味だ。第一邪魔だろうあんなに大きくては」
「……」
殺意を向けるミィナへ真面目な調子で返すウォレス。
そんな彼に周囲の視線がなま暖かくなった。
「……なんだお前ら。その失礼な視線は」
困惑気味に周りへ言い放つウォレス。
その肩に手が置かれた。エルロイだ。
「？」
「君にもそのうちアレの良さがわかる時が来る」
「は？」
優しく諭す調子で言いながら、離れていったエルロイ。それを見送りつつ戸惑うウォレス。
そんな彼をミィナは半眼で見ていた。

「じゃあ協力するとして、ギルドはどうします？」
ウォレスから離れて来たエルロイへ、クロードが声をかけた。
それに対してエルロイは、ふむとつぶやき顎に手を当てる。
どうやら思索するときの彼の癖のようだ。
「一時的に双方のギルドを解散して新たに六人で組み直す方が良いだろうね」
“ギルド”とは、冒険者同士協力し合うためのグループである。
これにより、冒険者グループは円滑に活動を進めるわけだ。
この六人で協力しあっていくならば、ギルドを組むことは妥当といえる。
「そうですね。で、ギルドマスターはエルロイさんが……」
「いや、クロード君。君がやりなさい」
「は？」
エルロイの言葉に、クロードの目が点になる。

ギルドを統括するギルドマスター。クロードはもちろん経験豊富なエルロイが適任だと思っていたのだが、彼は違うらしい。
「い、いや俺みたいな駆け出しより、エルロイさんみたいな経験豊富な人がやってくれた方が……」
戸惑いながらも言い募るクロードに、エルロイが首を振る。
「いや、私ももう年だしだ。それに冒険自体三十年ぶりだ。知識はあってもとっさの判断と決断の早さに欠けるきらいがある。現にこの罠にみすみすはまっているからね。むろん君のサポートは全力でさせてもらうよ？」
クロードは、エルロイの言葉に気圧されながらも逃げ道を探してミィナ達を見やる。
「し、しかし、そちらのメンバーの意見も……」
そう言ってミィナ達に水を向けると、リルは苦笑いをし、ミィナは明後日の方を向く。
「わたしは……その、あまり人に指示を出したりなどは得意ではありませんので……」
「あたしもパス。面倒だしね」
そう言ってくる二人に、クロードは苦虫を噛み潰したような顔になった。
そんな彼にウォレスが声をかけてくる。
「まあ、もともとお前はうちのギルドのギルマスだったわけだからな」
兄貴分にそう言われ、クロードは観念したかのように嘆息する。
「……分かりました。謹んでお受けしましょう。ハァ……。」
ため息をつきながら了承するクロード。
そんな彼を見てエルロイは小さく笑う。
「んじゃ、ギルド名はどうします？」
まず手始めにと言わんばかりにクロードが言うと、エルロイは顎に手をやった。
「ふむ。二つのギルドの集まりであるから、双方の名前から決める

としないかね？」
「なるほど……それでいきましょうか」
エルロイの提案に一つうなずいて周りを見回すと、ほかのメンバーに異論はないらしくうなずいてきたので了解するクロード。そのまま自分達のギルドか『蒼い流星』であるとつげた。
これにうなずいたエルロイがミィナに目配せすると、ミィナは仕方がないという風に『龍鱗』というギルド名を名乗った。
「『蒼い流星』と『龍鱗』ですか……」
双方のギルド名をつぶやき、思案するクロード。わずかに悩み、不意に口を開く。
「安直ですが、二つをくっつけて『蒼き龍鱗』なんてどうでしょう？」
そんなクロードの言葉に、一同軽く思案し、肯定するようにうなずいていく。

『いいんじゃない？』
『ですねえ』
『うんうん♪』
『そうだな、悪くない』
『ではそれで決定してしまうとしましょうか』

こうしてここにギルド『蒼き龍鱗』が結成された。この場を切り抜けるためだけに結成されたギルドではあったが、これがこの後長きにわたって彼らが所属することになるギルドの誕生であることなど、このときのクロード達には思いも寄らぬ事であった。

第三話

「ギャギャギャ」
耳障りな声が響き、人間の半分ほどの身長の妖魔どもが群を為す。
幸か不幸か、この迷宮の通路はわりと広い。大の男三人が並んで武器を振るい、余裕があるほどだ。
天井も高く、翼を広げたユーリカが軽く飛ぶことも不可能ではないくらいだ。
が、その分この小さな妖魔。
ゴブリンの群が圧倒的な数で攻めてきたときには、クロード達若い冒険者達は色を失った。
ゴブリンは、“小さき人（ショーティー）”と呼ばれるフィルボル族が、邪神や魔族の障気によって邪悪化した存在だ。
それはすでに長い年月を経て、一個の種族として確立した存在となっている。
その特徴は、“数”。
矮小な体躯と引き替えに、信じられないほどの繁殖力を発揮するのだ。
そして、その数に任せた攻撃こそが、ゴブリンどもの真骨頂とも言える。
つまり、数が増えれば増えるほど強大な敵となりうるのだ。
今ひしめいているゴブリンどもの数は、五十を降らないだろう。
それをたった六人で何とかするなど無謀も良いところだ。
「お、多すぎるだろ……」
思わずつぶやくクロード。その数に、楽観主義のユーリカですら息をのむ。
が、ただ一人、エルロイだけが飄々とした様子で歩き出す。
「エ、エルロイ?！」

その行為に思わず声を上げてしまうミィナ。
しかし、エルロイはライトメイスを手にゴブリンどもに向けて歩く。
そんな彼へ、数十匹のゴブリンが殺到した。

その刹那。

一陣の風が吹き。

竜巻のごとき烈風が吹き荒れ、ゴブリンどもを薙ぎ払う。
はるか東の地、ダイワより流れてきた剣士、サムライの奥義とも言うべき“旋風撃（トルネードブラスト）”の妙技だ。
「す、すごい……」
思わずつぶやいたのは誰だったのか？
「さあさみなさん、ぼんやりしている暇はありませんよ？　残りを片づけてしまいましょう」
エルロイのその言葉に我に返った一同意気を吹き返してうなずくと、残った妖魔を駆逐していった。

「しかし、妖魔が出てくるとは……。魔族が絡んでるんでしょうか？」
戦い終わって、クロードは壮年の冒険者にそう訊ねる。
その問いにエルロイの眉間にシワが寄った。
「難しいところですね。もっと高位の妖魔が現れるならまだしも、ゴブリン程度ではなんともいえません」

「……この奥にそんなのがいるってこと？」
そう言いながら二人に近づいてきたのはミィナ。先ほどの戦いでは、見事な弓捌きを見せている戦士だ。
「かもしれん。どの道最初の石室には元の場所へ戻れそうな仕掛けはなかったからね。奥へ進むしか我々の選択肢はない」
「はぁ……。ままならないわねぇ」
エルロイの言葉に大きく息を吐くミィナ。
すると、羽音とともに白い羽根を二、三枚舞わせながら大きな影が舞い降りる。
「クロードぉ♪　なんのお話しているの？」
クロードの頭上から覆い被さるように降りてきたユーリカは、クロードの背中に体重を預けつつ彼の頭の上に柔らかい大質量を二つ載せつつも、邪気のない笑顔とともに上から彼の顔をのぞき込んで訊ねてくる。
「この先に強力な敵がいるかもって話だよ」
そんな彼女へ苦笑い気味に答えるクロード。
するとユーリカは不安げに顔を曇らせた。
「……まだいっぱい怖いのが出てくるのかな？　どうするの？」
「……やっつけて、出口を見つけるのさ」
そう答えるクロードに、ユーリカの顔は花が満開に咲き誇るように笑顔となった。
「うん♪　はやくひなたぼっこしながらお歌を歌いたいなっ♪」
そんな無邪気なユーリカを見て、ミィナは小さく嘆息した。
だが、自然と顔がほころんでしまう。
「あ、あら……？」
自分でもよくわからず困惑するミィナ。その様子にエルロイの口元も緩む。
と、それに気づいてミィナがにらみつける。
「……なによニヤニヤして」
「いや、これがあの子の力かと思ってね」

そうミィナに返しながら、エルロイが、クロードにじゃれつくユーリカへと視線を向けると、ミィナもつられてそちらを見て嘆息した。
「お気楽なだけでしょ？　なんにも考えてないのよ、きっと」
「だが、彼女の無邪気さが、我々の不安感を払ってくれているのは事実だよ」
「……」
そう言われて口をつぐんでしまうミィナ。
「何にせよ、頑張ろうじゃないかね？　ミィナ」
「……ま、それもそうね」
そう言いながら肩をすくめると、奥を警戒しているウォレスとリルの方へ足を向けるミィナ。
そちらへ歩いて行った彼女を見送り、クロードは再びエルロイを見上げた。
「もし、魔族が絡んでいたら……」
「……難しいですね。やつらは強い。犠牲が出るやもしれません」
「……」
エルロイの言葉に口をつぐむクロード。

『魔族』

いにしえより、この大陸、エリンディル大陸にはびこり、神の子である人間を滅ぼさんとする神々の敵。
今、世界にはびこる魔族に対する対抗手段として、神殿は神具を捜索していた。
その神具を“探索する者”。
それが冒険者の発祥と言われており、神殿にて登録することで正式な冒険者となる。
そして、その経緯により冒険者は、魔族と相対する機会が多いとも言われている。

その力はたいていは強大無比であり、ベテランギルドでも壊滅してしまうことも少なくないという。
そんな連中の影を見た気がして、クロードは我知らず拳を握りしめた。

さらに奥を目指し、六人で石の通路を歩く。
先頭を歩くのはクロード。そこから少し遅れてウォレスが歩くついでユーリカとミィナが並んで歩き、一番後ろをエルロイとリルがゆく。
通路は相変わらず薄明るい感じで、静かではあった。
六人の歩く足音や装備品の音だけがこだまするそこを、彼らは無言で歩く。
と、不意に突き当たりが見えてきた。
そちらに目をやり歩く一同。
だが、唐突に先頭を行く少年の足が止まり、手を挙げて皆を制止させた。
しゃがみ込み、床を軽く指の腹で撫でたり、しながら丁寧に調べていく。
そして、手が止まったところで軽く床を押す。
カチリと音がして、ワンテンポ遅れて床が大きな口を開いた。
落とし穴だ。
一同息をはく。少年を除いて。
クロードは、さらに落とし穴の周辺を調べ始める。
「……やっぱりだ」
つぶやく声に、周囲は顔を見合わせた。
「落とし穴と壁の間にわずかにこすった後がある。たぶんこの壁が飛び出す仕掛けだ」
言いながらロープにナイフをくくりつけて穴の上へと投げた瞬間。

すさまじい勢いで両側の壁の一部が飛び出し、ナイフを挟み潰す。
その光景に、クロード以外のメンバーはのどを鳴らした。
「あ、あんたよく分かったわね……？」
思わずそう漏らすミィナへ、クロードはナイフが取れないかを試しながら答える。
「落とし穴とスイッチの位置が離れすぎだったしな。あれなら落とし穴に気づいて飛び越すって選択をしやすい。けど、この迷宮を作った奴は、引っかけで俺たちを転送するような質の悪い奴だ。それでおかしいと思ったのさ。っとだめだな取れねえや」
あきらめてロープを別のナイフで切る。戦闘用のダガーナイフとは別に三本用意したナイフが役に立ったと言えよう。
ナイフをあきらめたクロードは、飛び出した壁を調べると、おもむろに跳躍した。
せり出した壁の上側と天井の間はかなり空間があり、通り抜けられそうだった。
「……他に罠はないと思うけど、注意して上ってくれ」
その言葉に従い、一行は壁をよじ登り始めた。
これを越えた先の行き止まりに着くと、そこを調べ始める。
「……たいていはこの辺りに隠された扉が……あった」
突き当たりではなく、右側の壁。石壁に偽装されたドアを発見するクロード。
一部を押し込み、別の部分引っ張ったりしながらドアを開けた。
そこから覗くのはのぼり階段だ。
それをまずはクロードが罠を警戒しながら上っていく。
その出口を身を乗り出さないように気をつけながらのぞき込んだ。
そこに何もいないことを確認し、立ち上がりながら細かく部屋を観察する。
部屋の中には祭壇が一つ。彼の正面に見えた。
そして、左右の壁に扉が一枚ずつ。
「……よし、みんな上がってきてくれ」

クロードの声に階段上がってきたエルロイ、ミィナ、リル、ユーリカ。そして最後にウォレスが後方を警戒しつつ部屋に入ってきた。
メンバーが揃うのを確認し、クロードが改めて口を開く。
「エルロイさん、この祭壇ってなんだかわかりますか？」
「ふむ。あまり詳しくはないのだがね」
言いながら祭壇をつぶさに観察するエルロイ。
「……うん、何かの儀式用ではないかな？　それ以上のことは分からんね」
難しい顔でそう答えるのを見て、クロードは慎重に祭壇を調べ始めた。
「これといった仕掛けは無さそうだな……」
ひとしきり調べてそうごちる。
「連動系も無さそうだし、祭壇は安全か……？」
そう結論づけて祭壇から離れるクロード。
そのまま壁や床、二つの扉を調べていくと、扉には鍵がかかっていた。
しかもご丁寧にどちらにも罠が設置されている。
「こっちは毒針、向こうはクロスボウボルトか……」
そうつぶやき罠解除を開始する。
そんなクロード以外はわりと手持ちぶさたなのだが、余計なことはしない。
ユーリカですらこの時はおとなしいくらいである。
「……暇ねえ。あたしも罠探知や解除のしかた、覚えようかしら？」
「向いているいないはともかくとして、探知や解除ができる人間が複数いる事は良いことだ。一人に万一があっても、突破できる可能性が残るからね」
つまらなさそうに言うミィナにエルロイが答える。
しかしミィナも本気だったわけでもないようで、あまり反応せずに流していた。

ほどなくしてクロードが罠を解除し終え、一行は話し合った末に階段から見て右側の扉をくぐることにした。

果たして、その先に待ち受けているものとは？

第四話（前書き）

第四話。探索は続きます。
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第四話

扉をくぐった一同を待ち受けていたのは、やはり広めの通路。とはいっても、ゴブリンと戦った場所ほどではない。
せいぜい二人並んで武器を振るう程度だ。
「……暗いな」
言いながらランタンに火をつけるクロード。
その明かりのおかげで、先ほどまでと変わらぬ明るさとなった。
そのまま先頭に立つクロード。その後ろに、壮年の冒険者、エルロイと弓使いのミィナがたつ。
そしてユーリカとリルが続き、最後にウォレスが立った。
そのまま少し行くと、突き当たって扉があった。
「鍵が掛かっているな」
言いながら“シーブズツール”を取り出すクロード。
程なくして鍵が開き、ランタンの火を暗くしながら扉をわずかに開け、中の様子をうかがった。
すると、どこからともなく重低音が響いた。
「……イビキ？」
その音にリルが首を傾げながらつぶやくと、クロードが頷いた。
「ああ、化け物が居眠り扱いてやがる」
小さい声でそう伝えるクロードの眼には、その姿がはっきり映っていた。
石造りの部屋に簡素な木製の机と椅子があり、その向こうに、乱雑にしかれたわらの上に体毛が全く無い粘液質な肌の怪物が居た。
「トロウルだな」
うろ覚えながらもなんとか知識の片隅からその化け物の正体を引っ張りだしたクロード。

『トロウル』。ゴブリンと同じく妖魔の一種だ。リルと同じ大地の妖精（ドワーフ）が邪悪化した種族だ。
高い腕力と長い腕を利用してなぎ払うように攻撃してくるのが特徴だ。特筆すべきはその粘膜質の肌で一定以下のダメージは必ず無効化される。
倒しづらいやっかいな相手だ。
その説明に一同表情を引き締める。
「無理に相手をしたくはないが、脱出の手がかりも探さなきゃならないしな。不意を打って仕掛けようと思うんだが」
クロードがそう提案し、ほかの五人が頷き、タイミングをとって突入する。
ミィナの弓がしなり、撃ち出された強力な一撃（バッシュ）がトロウルの肌を切り裂き《スラッシュブロウ》、ダメージを与える。
ついでクロードがメルセデスに命じて攻撃（ファミリアアタック）を行わせ、幻影をまとったメルセデスが、トロウルを噛みちぎる。
これに目を覚ましたトロウルは、なにが起きたかわからずに慌てふためく。
すかさずリルが呪文を唱えた。
「荒ぶる炎の精霊よ！　サラマンダーよ！　我に破壊の炎の力、貸し与えたまえ！！　炎の、矢（ファイアボルト）！！」
声に従い、リルの目の前に炎が凝縮し、矢の形を為して飛翔する。
為す術もなくそれを受けたトロウルの体は焼け焦げていく。
そしてウォレスが盾を構えながらトロウルに接敵（エンゲージ）し、剣を振るった。
しかし、その刃はかの妖魔の粘液質の肌に阻まれ、傷を付けられない。
「やはり無理か！」
そうつぶやくウォレスの横より、エルロイが現れ、手にしたライトメイスを振るった。
その一撃はダメージを意図したものではなく、相手の防御を壊す

一撃（アーマーブレイク）だ。
ここでトロウルは、やっと立ち上がり、体勢を立て直したが、すでにその体はボロボロだ。
続けざまにミィナの矢と、メルセデスの突撃を受けてたたらふむ。
大きく振り回した腕が、ウォレスとエルロイを襲うが、ウォレスがエルロイをかばい《カバーリング》、盾と巧みな体捌き《アイアンクラッド》でダメージを減じる。
そして、ユーリカの声が響いた。
「クロードぉ！　ガンバってぇ！《ジョイフルジョイフル》」
その声援を受け、活気づいた彼は、またメルセデスへと気力を送る。本来、使い魔には敵を攻撃する力は無い。特殊な気力制御で使い魔に力を分け与えなければ、敵を打ち倒す力足り得ないのだ。
クロードはその制御法を修得しているのだ。
気力を受けたメルセデスが、動物の王と呼ばれる動物たちの偉大な祖の幻影をまとって雄叫びをあげて突進した。
動きの鈍いトロウルは、何とかそれを避けようとするが、間に合わない。
そして、ユーリカの口から、短音節が飛び出す。
破壊を促進する音（ディスコード）によって、強化されたメルセデスの一撃は、トロウルの強靱な胸板を易々と貫いた。

「さて、なにか手がかりは……」
トロウルを倒した一同は、出口に連なる手がかりを求めて部屋の中を物色する。
一通りクロードがチェックした限りでは罠は無さそうではあったが、油断は出来ない。
しかし、調べてみてわかったのは、妖魔どもの休憩所のようなものだと分かった。
先ほどのトロウルの寝床のみならず、小さな妖魔の寝床や、獣毛

のようなもの。
食料に食べかすなどが散乱している。
「手がかりは無しか……」
肩を落としつつつぶやくクロード。その肩に手が置かれた。エルロイだ。
「うむ。だが、分かったこともある」
「え？」
彼の言葉に、クロードが顔を上げた。
「獣毛はバグベアのものだ。これだけ大量の妖魔が生活している以上、上位妖魔か魔族が咬んでいる線が濃厚だな」
なんの慰めにもならない情報ではある。
だが、“遺跡の街ライン”の直近の遺跡から飛べる場所で、これだけの妖魔との遭遇は異常ではある。
せめてこの事を神殿に伝えなければ、とんでもないことになるやもしれない。
降って涌いたかのような重大事にクロードは体を振るわす。
「ねえ！　ちょっと来てくれないクロード君」
向こうでミィナが手招きして自分を呼ぶのに応じ、エルロイへ断りを入れてそちらへ向かう。
「ユーリカちゃんが見つけたんだけど、なんだと思う？」
足下を指さし、近づいてきたクロードに言うミィナ。
見ればトロウルの寝床に埋もれるように握り拳大の丸い金属球がのぞいていた。
「なんだろうな？」
トラップの気配も感じられなかったのでそれを手に取るクロード。
そこへウォレスもやってきたので、彼に渡して見てもらう。
戦士ながらに博識なウォレスなら思い当たるものがあるかもしれないと思ったからだ。
しばらくそれを眺めたり触ったりしていたウォレスは、おもむろに口を開く。

「こいつはミスリル製だな。これ自体には特に仕掛けはないが、もしかしたらなんらかの仕掛けの一部かもしれん。とりあえず確保しておこう」
そう言ってクロードへミスリル球を渡す。
結局それ以上なにも見つけられなかった一行は、祭壇の間へと戻ることにした。

祭壇の間へ戻った一同は、もう一つの扉へ向かう前に、もう一度祭壇をチェックした。
すると、ミスリル球が光りを発し、祭壇の中央に台座がせり出す。
「なるほど、この祭壇は特定のアイテムが接近することで機能するマジックアイテムだったんだな」
祭壇の動きを見てクロードはつぶやくと、ミスリル球を手に祭壇へ近づいた。
台座の中央には窪みがあり、そこにミスリル球をはめると、ピタリとはまり込み、光が止む。
が、それ以上なにも起こらなかった。
「なにも起きませんねえ」
ゆったりした調子でリルがつぶやく。
「……たぶん他にもアイテムが……台座に文字が？」
台座に刻まれた文字を見つけ、クロードはウォレスとエルロイへ呼びかけた。
「古代文字だな。何とか読めそうだ。“赤と青の尖塔に御印が灯るとき、紫光の月が道を照らさん”か……」
「それほんとに合ってるんでしょうね？　地下迷宮に尖塔も月もあるようには思えないんだけど？」
ウォレスの読み上げた内容に、ミィナが疑わしそうに言う。
するとウォレスがムッとなる。

「そう言うならお前が読めばよいだろう」
「……悪かったわね。読めないわよ」
ウォレスの言葉にミィナが仏頂面になる。
その様子にクロードが苦笑いし、エルロイが嘆息しながら首を振った。
「と、とにかく左の扉の向こうを調べましょう。他の手がかりがあるかもしれませんし。ね？」
不穏な空気を感じ、リルがそう取りなす。
妥当な提案に一同がうなずいた時、左手の扉が突然開け放たれた。

第四話（後書き）

第四話、いかがでしたでしょうか？
戦闘シーンにスキル名を挿入していますが、どうでしたかね？
読みにくくはありませんでしたか？
実験的にそうしてみたのですが、不評ならスキル名は削除しますので、その辺り一言いただけるとうれしいです♪

それでは次回もよろしくお願いしますね♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0785x/

煌めく刃と白き翼の歌

2011年11月4日14時14分発行